

ポローニア

paulownia

【巻頭言】 教育局教育長挨拶 溝上智恵子「アフター・コロナに向けて」

- 2 ●附属11校をつなぐ「芸術・文化交流の集い」——西垣昌欣
- 3 ●高等部国語科の作文指導について——浅野紗希／鈴木牧子
- 3 ●駒場の探究 一教科の枠にとらわれない授業——理科課題研究を通しての学び——黒田圭佑
- 4 ●黒姫生活代替活動——関野智史
- 4 ●2年ぶりの運動会——河場哲史
- 5 ●「第10回記念高校生国際ESD シンポジウム・The 3rd SDGs Global Engagement Conference @ Wherever you are」を開催しました。——吉田賢一
- 5 ●オリンピック・パラリンピックにふれる1年——眞榮里耕太
- 6 ●幼稚部「にじりんピック」でよーいどん!——若井広太郎
- 6 ●2学年沖縄県伊平屋島修学旅行——征矢範子
- 6 ●校外学習「どんぐりひろい」——川津圭希
- 7 ●令和3年度 教育実習研究授業・合評会——徳竹忠司
- 7 ●未来に輝け! 東京2020パラリンピック報告会から——山本夏幹
- 8 ●朝永振一郎記念第16回「科学の芽」賞表彰式・発表会オンライン開催——梶山正明



筑波大学
University of Tsukuba



「TOKYO 2020 グルメものがたり」 附属大塚特別支援学校小学部5・6年の共同制作（学習発表会背景画）

アフター・コロナに向けて

附属学校教育局 教育長 溝上智恵子



MIZOUE
CHIEKO

長びく新型コロナウィルス感染症との闘いはまだ終わりが見えませんが、この感染症拡大が収束したら、私たちの学校生活はどのように変化しているのでしょうか。以前とは異なる学校教育が展開されるのではないでしょうか。

例えば、教育の国際化を進めるには、様々な国や地域の人たちと直接触れ合うことが欠かせませんが、コロナ禍を経て私たちは直接海外にいくことができずとも、一部かもしれません、国際交流を行う術を獲得しました。またコロナ禍以前はICTの利活用を苦手として敬遠していた人たちも、やむをえない状況だったとはいえ、かなりICTを駆使できるようになりました。これらの知識や経験は、今後の教育を考える際に、極めて大きな財産となります。

筑波大学の建学の理念に「国際性豊かにして、かつ、多様性と柔軟性とをもった新しい教育・研究」を開発することが掲げられています。筑波大学附属学校群では、今回のコロナ禍における経験を生かして、国際性と多様性と柔軟性を備えた人材育成に今後も積極的に取り組んでいきたいと思います。

附属11校をつなぐ「芸術・文化交流の集い」

第1部 講師の石田智哉氏



第2部 司会の生徒たち

令和3年12月12日(日)、筑波大学附属学校教育局主催の「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」(第1部・第2部)がオンラインで開催され、附属学校群11校の児童生徒および保護者約230人が参加し、交流を図りました。

第1部は、附属桐が丘特別支援学校卒業生の石田智哉氏による「小さなことも、面白がりながら積み重ねる」と題した講演が配信されました。講師の石田氏は、ドキュメンタリー映画『へんしんっ!』で、第42回ぴあフィルムフェスティバルPFFアワード2020グランプリを受賞され、様々なメディアから取材を受けるなど注目を集める若手映画監督です。映画制作に携わるようになった経緯や附属学校で学んだ先輩としてのメッセージなどを、スライド資料や当時の担任の先生との対談を交えながら講演していただきました。

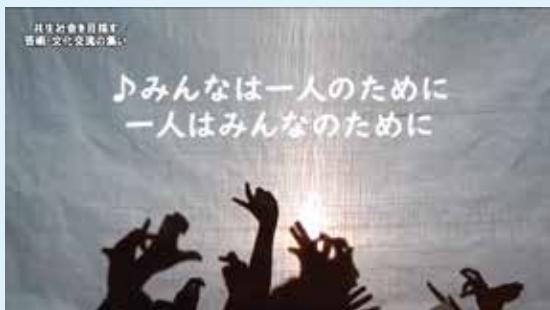
第2部は、各附属学校の児童生徒がリレー形式で発表する「プレゼンテーションリレー」の様子が配信されました。

普通附属と特別支援との連携推進委員会
西垣昌欣

附属駒場高等学校2年生と附属桐が丘特別支援学校高等部1年生の2人による息の合った司会進行のもと、「交流・共生」をテーマに、体操の実

演や影絵による表現、寸劇や記録の映像を交えた報告など工夫を凝らした各校の発表がリレーされました。発表後には、質疑応答が行われ相互交流の機会も設けられました。

コロナ禍で一堂に会する交流が難しい中で、オンラインという形で各校がつながり、先輩の話や各校の発表に触ることを通して、「共に生きる」ことへの考えを深め、新たな気付きを得るよい機会となりました。



工夫された発表作品(附属小学校の影絵)



高等部国語科の作文指導について

附属聴覚特別支援学校 教諭 浅野紗希 鈴木牧子



本校高等部国語科では、作文指導の一環で下記の二つのコンクールに生徒作品を応募しています。

(1) 聾学校作文コンクール

(聴覚障害者教育福祉協会・全国聾学校校長会主催)

全国聾学校作文コンクールは、聴覚特別支援学校に在籍する児童・生徒を対象とした作文コンクールです。今年度のテーマは「自然や人とのつながりの中で、自分に焦点をあてたもの」でした。

本校高等部では、まずテーマに沿った作文を全生徒が自由に書き、校内審査で選ばれた3作品について、国語科教員が指導しました。指導では生徒の考え方・表現を生かすことに留意し、生徒がより考えを深め、豊かに表現できるよう

にアドバイスしました。

審査の結果、『わたしにとって「音楽」とは』が金賞、『合理的配慮に対する新たな考察』が銀賞、『コロナ禍で学ぶ人との関わり

方』が銅賞を受賞しました。生徒にとって、考えたことを表現する喜びを感じ、自信を得られる機会となるよう、これからも指導していきたいと思います。

(2) 全国高校生読書体験記コンクール

(一ツ橋文芸教育振興会主催)

読書体験記とは、本を読んだことで自分の内面や生活にどのような変化が起きたかをまとめるものです。本校高等部国語科では、読書体験記に取り組ませることで、読書に親しむ態度を育み、思考力や文章力の向上につながると考え、昭和60年より毎年夏休みの課題にしてきました。そして、校内で選考した作品5編を毎年本コンクールに応募してきました。今年で37回目の応募になりましたが、37年連続で千葉県の優秀作品5編に入選しています。今年度は83,538編の応募作品の中から、本校生徒の「聾者は障害者か?」という作品が文部科学大臣賞となりました。これまでの歩みを振り返ると、この取り組みは生徒の成長を促すものだと実感できます。今後も生徒の様々な力を引き出し伸長させていけるよう指導に当たっていきます。



聾学校作文コンクール入賞者



駒場の探究 —教科の枠にとらわれない授業— —理科課題研究を通しての学び—

附属駒場中・高等学校 教諭 黒田圭佑

本年度、理科(化学)の課題研究で、「電気化学」に関するテーマで指導させていただいた。リチウムイオン二次電池の反応ひとつとっても、たった2つの電気化学反応を使って世界を席巻しているので、化学反応が直接産業になるという意味で、電気化学は非常に面白い分野である。本講座の前半部では、いくつかの次世代型電池候補として注目されている電池の仕組みを、実験や実習、また大学の電気化学の専門家の講演などを通して学ばせた。後半部では、前半部で学んだ内容から自らが電池に関する課題を抽出し、それぞれが自由に設定したテーマに対して研究を行った。

高校段階では結果の裏付けとなるような電気化学測定や反応過程の結晶構造解析ができない分、どのように結果として結論づけるかが非常に難しい課題であったが、受講者は仮説を立て、その仮説が本当にあっているかができる範囲内で実験や観察で実態を調べたり、論文を読んだりして調べ、なぜそのような結果になったのかをよく考えていました。当然、論文を読んでいると高校生ではなかなか理解するのが難しい単語などに遭遇することもあったが、自分でまた

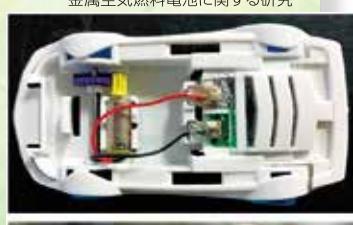
調べ直したり、勉強したりして、最終的には教員側が手取り足取り教えなくても自分自身で調べ上げて解決していく姿勢が身についた。受講者が行き詰った場面では、教員も一緒にになって探究し、勉強していくという姿勢を見せてることで、生徒の研究に対する意識に再度火をつけて、やる気を高め直すことができた。このことは課題研究のみならず、いろいろな生徒指導の場面でつながってくる部分であるため、これからも活かしていきたい。



色素増感型太陽電池に関する研究



バイオ燃料電池に関する研究



金属空気燃料電池に関する研究





黒姫生活代替活動



昭和記念公園での校外活動

第2学年 行事担当
関野智史

黒姫生活。本校では、中学3年間の中で唯一宿泊を全期間学年一緒に行う行事であり、

学級委員を中心に3泊4日の生活を自ら創り出す行事であった。残念ながら今年度も宿泊としての実施は叶わず、2日間の代替行事として、日帰りの形で実施となった。黒姫生活代替活動、略して「黒活」と呼称し、1日目は昭和記念公園での校外活動、2日目は校内での活動を立案した。校外活動では、班ごとのオリエンテーリングや借り人競争などの学年レク、それぞれの学級レクなど、秋晴れの下で活動を楽しんだ。2日目は、午後からの登校とし、有志団体の発表の後、LEDライトを組み合わせて作成したファイヤーサイトを設置し、あたかも本物のキャンプファイヤーを行っているような雰囲気を創り出した。途中、実際に炎を使用したキャンドルサービスも行い、さらにその気分を高めた。コロナの中、直接の接触をしないメガホンを使用したオリジナルのフォークダンスも行い、いよいよフィナーレへ。フィナーレは、中学初の試みの校内花火大会であり、花火業者にお願いし、簡易な打ち上げ花火と、最後は莊厳なナイアガラ花火を鑑賞した。帰りには、昇降口から校門まで、委員がキャンドルを設置し、ファイヤーロードで名残惜しく見送り、2日間の黒活を総括した。

本来予定していた宿泊行事とは規模も内容もかなり縮小することとなったが、この行事で獲得すべき、生徒たちが自らの力で学年行事を企画運営するという内容については、何とか保証することができたのではないかと思っている。



LEDを使ったファイヤーサイト



フィナーレのナイアガラ花火



2年ぶりの運動会

大きくなっただけ! (幼稚部演技)



附属久里浜特別支援学校 教諭
河場哲史

令和3年10月16日(土)に、今年度の運動会を開催しました。昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、運動会は中止となってしまったため、2年ぶりの開催となりました。

運動会が開催できたとはいえ、引き続き感染症対策を徹底させるために、幼稚部と小学部を分散して実施し、参観できる保護者の人数を一家庭2名までとし、運営に関わる教職員の人数も必要最小限としました。実施時間も短縮したために、例年の運動会に比べると種目数が減り、縦割りの活動や保護者参加種目は自粛せざるをえませんでした。

このような制限のある中での運動会でしたが、幼稚部は「かけっこ」と「玉入れ」と「機関車トーマス」をテーマにした種目」に取り組みました。2年ぶりの開催ということで、幼児の半数以上が初めての運動会でしたが、御家族の方々からのたくさんの応援を力に変えて、最後まで楽しく取り組むことができました。また、小学部は「徒競走」と「玉入れ」と「ダンス」に取り組みました。加えて上級生は、「開会式」や「閉会式」の運営や進行の役割を担うなど、下級生の目標となるような立派な姿を披露してくれました。また、ゴールを目指してひたむきに走ったり、チームの勝利のために一生懸命に玉を入れようしたりするなど、児童一人一人の頑張りが輝いた運動会となりました。



ゴールを目指せ（小学部徒競走）



たくさん入れるぞ（小学部玉入れ）

「第10回記念高校生国際ESD シンポジウム・The 3rd SDGs Global Engagement Conference @ Wherever you are」を開催しました。

附属坂戸高等学校 国際教育推進委員長 吉田賢一

坂戸高校では海外の姉妹校などと連携し、平成24年度から国際シンポジウムを開催しており、今年は第10回の記念大会となりました。平成26年度にSGH校、令和元年度にWWL校に指定され、持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題に主体的に取り組む姿勢を涵養するとともに、グローバル人材としての資質を高める教育を積極的に進めています。本校は昨年度SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）Schools' Networkに加入しました。SEAMEOは、世界中の教育機関間のネットワークとパートナーシップを発展させることを目的としたSEAMEO Schools' Networkを設立しています。教育、科学、文化の優れた実践を他の参加教育機関と共有するためのプラットフォームを構築し、世界中の教育機関とのつながりを促進していくことが目的とされている組織です。SEAMEO Schools' NetworkにはASEAN諸国を中心におよそ800もの教育機関が加盟していますが、日本の高等学校では

初めて SEAMEO Schools' Networkへの加盟が認められることとなりました。今回のシンポジウムにはその Schools' Networkに加盟している約200の学校から教員・高校生に参加していただきました。坂戸高校では来年度以降もこのネットワークをさらに広げ、グローバルを身近に「自分ごと」として意識できる教育活動を展開していく予定です。



オリンピック・パラリンピックにふれる1年

附属小学校 教諭
眞榮里耕太



今夏、東京オリンピック2020が新型コロナウィルスの影響もあり、1年遅れで開催されました。残念ながら無観客での開催となり、会場に足を運んで実際にスポーツの祭典を体験することはできませんでした。しかし、普段子どもたちが生活する近辺で開催されるということあって、多くの子どもたちが楽しみにしていました。

そのような中、本校でもオリンピックを題材とした朝会の話や保護者が中心となって開催される若桐祭でもオリンピック・パラリンピックに関連したイベントがありました。

若桐祭では、ブラインドサッカーやゴールボールのように

目隠しをしてボールを蹴ったり、ボールを転がしたりすることや車椅子に座ってバスケットゴールにシュートしたりする体験をしました。普段経験することができないものばかりでしたので何度もチャレンジする子どもたちの姿がありました。

会場のスペースや感染対策の関係上、各種競技の一部だけの経験でしたが子どもたちは楽しみながら取り組むことができました。

保護者の方々の協力のおかげでいい経験をすることができました。

また、オリンピック開催直前の7月の朝会では、オリンピック・パラリンピックについての内容でした。間近に迫ったスポーツの祭典への子どもたちの興味関心を沸き立たせるかたちとなりました。





幼稚部「にじりんピック」で よーいどん！

附属大塚特別支援学校 主幹教諭
若井広太郎

親子行事「にじりんピック」を行いました。幼稚部の保育で行っている活動を保護者のみなさんと一緒にに行い、親子で楽しみながら、お子さんの成長の姿を見ていただく行事です。まずは「造形遊び」で作成した聖火トーチを持って、親子で入場。入場門から出てくる姿は、みんな誇らしそうです。準備体操をした後、「お詫遊び」で経験した「はらぺこあおむし」のサーキット運動をしました。平均台を渡ったり、トンネルをくぐったりと、いろんな動きにチャレンジしました。そしてメインイベントの「かけっこ」。ゴールにいるお母さん、お父さんを目指して、みんなで「よーい、どん！」立派にゴールでき、閉会式では全員が金メダルをもらいました。みんなで楽しめた素敵な一時になりました。



2学年沖縄県伊平屋島修学旅行

附属高等学校 第2学年担任長 征矢範子

令和3年11月、東京と沖縄の感染状況の好転を受け、PCR検査で参加者全員が陰性であることを確認し、修学旅行へ出発しました。感染予防などの制限はあるものの、入学してからすべての宿泊行事が中止となっていた私たちにとって、修学旅行に行ける喜びはひとしおでした。

伊平屋島では、民泊やスノーケリングを実施しました。夏休みに学校のプールで、スノーケルクリアやフィンの使い方などの実習を行った上で、全員がボートエントリーによるスノーケリングに挑戦しました。小笠原諸島沖の海底火山の噴火による軽石の影響で、海の中は多少透明度が落ちるもの、ウミガメやクマノミのいる美しいサンゴ礁を見た生徒たちは大興奮の様子でした。



校外学習「どんぐりひろい」

附属桐が丘特別支援学校 教諭 川津圭希



2年生で学習する生活科では、身近な自然と関わり、それらを利用して遊ぶことや町の施設を使うことを目標に、毎年校外学習を実施しています。

今年度は、10月8日(金)、小学部1・2年生と保護者の方にも参加して頂き、密にならないように気を付けながら、都立城北中央公園にどんぐり拾いに行きました。1年生は初めての校外学習のためか緊張している様子もありましたが、多くの児童は笑顔で公園へ出発しました。

公園に着いて、まず記念撮影。学年ごとに撮りました。ピースをしたり、ガツツポーズをしたり、緊張し真顔になっていたり、素敵な写真が撮れました。撮影が終わったら、いよいよどんぐり拾いです。大きな木の下に、それぞれビニールシートを敷き、そこに座り、どんぐり拾い開始！びっくりするほどたくさん落ちていて、ビニール袋いっぱいにどんぐりを拾いました。どんぐりをどんどん袋に詰めていく子もいれば、じっとどんぐりを見つめる子、途中で虫を発見する子もいましたね。どんぐり拾いの後は、ミニゲームをして帰りました。



疲れたけど、みんなでどんぐり拾いをめいっぱい楽しみました。また行こうね！

令和3年度 教育実習 研究授業・合評会



理療科教員養成施設 講師
徳竹忠司

令和3年度の教育実習の最終日に、研究授業と合評会が行われました。附属視覚特別支援学校 鍼灸手技療法科の指導の下、事前指導・授業見学を含め、約1ヶ月間にわたり、理療科教員となっていくための

最初の一歩を踏み出しました。本年度の実習生となりました当施設学生は、入学時点から新型コロナウイルス感染防止対策の影響をうけました。入学式は実施されず、授業の開始は5月から、それもonlineでの実施となりました。視覚に障がいを持つ学生にとって、onlineでの授業参加は、大変な労力を費やしました。対面での講義には恵まれなかった2年間ではありましたが、各自の努力で学習を深め教育実習に臨むことになりました。

理療科教員養成施設学生の研究授業はグループで準備を行い、代表者が授業を行うという形式をとっており、今年度は3グループでの実施となりました。担当科目は「あん摩実技」「鍼実技」「解剖学」でした。視覚障がいを有する生徒への指導は、言葉のみでは十分ではなく、特に実技実習では実際に生徒の身体の誘導が必要となります。感染対策を講じながらの授業となり、若干の歯がゆさを感じましたが、これから理療教育では感染対策を重視した授業は必須となることから、先進の体験となったのではないかでしょうか。



模型を利用した解剖学研究授業の準備



合評会で授業担当者に対する評価を聞く

未来に輝け! 東京2020 パラリンピック報告会から

附属視覚特別支援学校 教諭
山本夏幹

2021年12月6日と14日に本校体育館を会場として、東京2020パラリンピック競技大会報告会を実施しました。同大会には本校関係者から16名の選手が出場し、木村敬一選手(パラ水泳)の金メダルをはじめ、多くの卒業生や在校生の活躍が目立った大会でした。

報告会には総勢9名の選手にご参加いただきました。

12月6日は高等部普通科・音楽科生徒を対象とした報告会を開催し、石浦智美選手(パラ水泳)、寺西一選手(5人制サッカー)、天摩由貴選手(ゴールボール女子)、米岡聰選手(パラトライアスロン)の4名に登壇いただきました。12月14日は小学部5、6年生児童・中学部生徒を対象とした報告会を開催し、川嶋悠太選手(ゴールボール男子)、木村敬一選手(パラ水泳)、高橋利恵子選手(ゴールボール女子)、園部優月くん(本校高等部普通科3年生・5人制サッカー)、若杉遙選手(ゴールボール女子)、の5名に登壇いただきました。

報告会は二部構成とし、第一部は選手たちから児童生徒に向かって東京パラリンピックを終えて伝えたいたメッセージを届けていただきました。第二部では児童生徒から選手に質問をして、各選手に答えていただきました。報告会に参加した生徒たちは「目標に向かって一生懸命頑張って応援される優しい人になりたいと思いました。」「『夢はきっと叶う』ということを言っている時に自分も挑戦してみようかなと、私の夢って何かなと見直すことができました。」などの感想が聞かれ、今後の未来に向けて積極的にチャレンジしようとする気持ちを芽生えさせる機会となりました。



朝永振一郎記念第16回「科学の芽」賞 表彰式・発表会オンライン開催 (2021.12.18)

附属学校教育局 教育長補佐 梶山正明

12月18日(土)、朝永振一郎記念第16回「科学の芽」賞の表彰式・発表会をオンラインで開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回は世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の中、国内の学校263校及び海外8か国9校の日本人学校等から小・中・高校生部門合わせて2,441件の応募がありました。その中から小学生部門7件、中学生部門6件、高校生部門1件の合計14件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者31名、本学からは永田恭介学長をはじめ加藤光保副学長、和田洋副学長、溝上智恵子副学長などが出席し、総勢で40名程の出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である梶山正明附属学校教育局教育長補佐の開会の挨拶で始まり、全受賞者の呼名と作品名の紹介の後に、永田学長からの表彰状の読み上げと祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び副学長による作品の講評、学長による総評が行われました。発表会では、受賞者達が画面上に概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしたりしていました。

最後に「科学の芽」賞実行委員会委員長から閉会のことばがあり、その後、名残惜しそうに手を振りながら、約2時間のオンライン表彰式・発表会が無事に終了しました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願ひいたします。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事來歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



発行日……令和4(2022)年2月28日

発行者……附属学校教育局教育長 溝上智恵子

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印 刷……広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

